



Title	カント哲学と最高善：カントにおける自律思想への 転回
Author(s)	角，忍
Citation	大阪大学，2007，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49112
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていない ため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利 用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文につい てをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	角 忍
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 1 4 5 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 3 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	カント哲学と最高善ーカントにおける自律思想への転回ー
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大橋 良介 (副査) 教 授 入江 幸男 教 授 須藤 訓任 助教授 舟場 保之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、カントが『純粋理性批判』から『道德の形而上学のための基礎づけ』を経て『実践理性批判』に到って、道德の基礎づけを自律（アウトノミー）の思想として、ないし宗教や神学に依存することのない「自由」の思想として、確立する経緯を明らかにしたものである。汗牛充棟の観のあるカント研究のなかで、この自律の思想もまたいろいろに論じられてきたものではあるが、著者はそれらの見解を仔細に検討し、その問題の核心が「最高善」の捉え方にあることを見極める。カントは『道德の形而上学のための基礎づけ』以前、道德にとっての実行原理すなわち「動機」を、道德性が幸福に結びつくという意味での「最高善」の理念に求めていた。すなわち『純粋理性批判』において、最高善はその可能性の条件としての神と魂の不死にむすびつくものとされ、道德法則にとって「拘束力」を持つ可能性の条件として、そのかぎりで道德法則の条件として、捉えられていた。しかしそれでは、道德法則はその動機に関して、道德の外部にある宗教に依存することとなり、本当に意志の自由にもとづくとは言えない。カントは、道德の「判定原理」に関しては神学からの自立を果たしていたが、その「動機」ないし実行原理に関しては、なお神学および宗教に依存していたことになる。

その後、『道德の形而上学のための基礎づけ』において、カントは、最高善を「動機」とするかぎり実践的原理は不可避免的に経験的なものとなると考えるようになる。そこで道德的動因による意志の規定から、目的一般に対する関係を一切排除した。最高善を動機とすることですら道德性に反する「不純」な要素と見なすに至るのである。そして、こういった神学的「目的論」の残滓を一掃し、道德的動機を「純化」し、判定原理（「規準」）のみならず実行原理（「動機」）も、純粋に道德の内に含まれる原理として確立しようとする。それが自律思想の成立となる。この考えが本当に確立するのは『実践理性批判』においてである。そこでは道德法則と最高善とは、道德法則が最高善の実現を「命令」する、という関係において捉えられる。最高善の実現は、義務となる。道德は最高善の理念を、「純粋実践理性の究極目的」としてそれ自身の内に含むものとなり、自由、不死、神という理念は、「最高善」の可能性の必然的条件となる。こうして形而上学の究極目的であった三つの理念、自由、不死、神は、道德的・実践的意図において、道德法則を介して、「純粋実践理性の究極目的」たる最高善の概念の内で統一され、それによって、実践的な客観的実在性が保証されることとなる。その時、道德は真に自律的なものとして確立する。

なお、本論文は 400 字換算で約 1100 枚の分量である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、カントにおける道德の自律思想の成立を、最高善の概念の変化を軸にして、ないしこの概念をカント哲学のアルファにしてオメガとして位置づけることにより、解明したものである。ドイツにおける研究状況の批判的検討が、前提となっているので、学界において本論文が主張すべき位置と意義も明確に述べられる。また、カント哲学において最高善をめぐるなおも残る問題点も、指摘され、単なるカント思想の略述には終わっていない。この研究によって、まずカントの「批判哲学」の本質が、最高善と知恵と哲学との関係から明らかになる。次に、最高善の概念は、しばしば言われるような自律に反する独断論的残滓ではないこと、むしろこれを自らの究極目的として意図し得る点に、「自由の自律」の本質が存することが、結論づけられる。さらに、批判哲学の本質は「学」を介して最高善の実現に尽力することに、そしてそのことによって、この本質は「創造の最終目的」の達成に「協力」することにあること、さらに言えば、理論的には「最高善の認識」を、実践的には「意志が最高善に適合すること」を意味するような「世の知恵」(Weltweisheit)にあることが、明らかにされる。哲学とは、「その中で理性が最高善を学にもたらそうと努める限りでの、最高善についての教え」であることが、浮き彫りにされるのである。

以上の論述は堅実且つ綿密ではあるが、問題点もまた含まれる。すなわち第一には、このカント解釈からは、第一批判と第二批判が織りなす道德思想は浮き彫りになるが、それだけに第三批判が占めるべき位置が、ほとんど見えてこないことである。次に、前半の自律思想の確立のプロセスではいったん背景に退く「最高善」の考えが、後半になってにわかに主題の位置を占めるという全体構成が、すこし不整合の印象を与えることである。後者の問題は、カントの思想そのもののなかで最高善が第一義的な動機としては排除されてもおおむね一種の動機づけの性格を認めるという、二重性の問題と関連することが、試問のなかで明らかとなった。しかしながら、その問題点は、論文のなかでは明らかにされていない。

以上のような問題点は残すものの、それは本論文につづいて究明されるべきものと見なすことができる。本論文はその徹底した思索と堅実な論証とによってカント研究のなかで明確な位置と意義を得るものであり、大阪大学の博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。